



学校の七不思議

10月27日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

10月27日のおはなし「学校の七不思議」

ハイコー！ ハイコー！
死後とか好き。
わしらはこびとだ
ハイコー！ハイコーハイコー
ハイコー！ ハイコー！
妹ハスキー
ラララララララ
ハイコー！ハイコーハイコー……、

暗がりからぞろぞろと7人のこびとが出てきたときには確かに仰天したが、その歌を聞き取るに及んで恐怖心はほとんど消えた。こびとたちは俺に気づくとわらわらと集まってきた。いかに小さいとはいえ7人もいると、しかもそれが敵意に満ちた視線を投げかけられたりすると、さすがにあまりいい気はしない。

「あんたたち、何をしているんだ、こんなところで」
おれは手元のハンディカムを彼らの方に向けながら言った。先制パンチだ。
「それはこっちのセリフだな」怒りっぽそうなのが言った。「人間がこんな所で何をしている」
「ロケだよ。肝試しみたいなもんだ。若手のお笑い芸人5人が本物の霊的スポットに挑戦！ってな。おれはここに当たったんだ」
「あとの4人はどこだ」機嫌の良さそうなやつが聞く。「他の階にいるのか」
「ここにはおれだけだ。あとはそれぞれ元病院とか、元旅館とか、墓場とかだ。みんなこうやってカメラを持たされて自力でロケをしているわけ」

納得したのかしていないのか、7人はお互い同士でおしゃべりを始める。口々に何か言っているのだがあまりに早過ぎて聞き取れない。ハンディカムでその様子を撮影しながら思う。これはあんまり肝試しって感じじゃないな。このままだとただ7人の賑やかな野次馬と会った風にしか見えない。いかんいかん。それではおれが映るコーナーが減ってしまう。

「ここには、何かこう、肝試しっぽいのはないのかな」尋ねてみると今度は一斉に返事されて聞き取れない。「何だって？ 順番に話してくれよ」
「理科室の人体模型だな」「トイレには本物がいるらしいぜ」「屋上から飛び降りた少年がいまも窓の外を通り過ぎるって聞いたぜ」「給食室に毒をもったお婆さんが」
「見たことあるのかい」
とたんに沈黙。7人が目を見交わす。眠たそうなのが言う。
「理科室の人体模型なら」
「それ、動いたりしゃべったりするわけ？」返事がない「ただの模型を見たってこと？」
「ただの模型を見たってことだ」

口をとがらしてふーっとため息をつく。7人は気まずそうにもじもじしだす。風が吹いて足元に紙が吹き寄せられる。どこかの教室に貼ってあった標語のポスターかなんかだ。手書きで何か書いてあるが暗くて読みとれない。

「さっき、ハイコーって歌っているように聞こえたけど」
「そうそう。よく気づいたね」身を乗り出すようにして、眼鏡をかけたのが説明をし始める。「前は鉾山が閉鎖されたから廃鉾のことを言っていたんだが、いまではほら、ここ、廃校だろ？」

ふーっ。
ダジャレかよ。
だめだ！ こいつら使えねえ！ せめて俺を怖がらせるようなことを言ってくれば、まだしもリアクションの取りようもあるのだが、ダジャレかよ。もう一回ため息をついてしまう。

ふ一つ。

「くしゃん！」いまにもくしゃみをしそう顔をしたやつがやっとくしゃみをした。「くしゃん！」

「あ。そうだ！」それがきっかけになったように、引っ込み思案な感じのやつが思いつく。みんなが見ると急に照れてしゃべれなくなる。「いや。いいよ、もう」

「彼女は？ ほら、職員室の」すっとぼけた面をしたやつが足元の紙を拾って俺に見せる。標語が書いてある。好き嫌いなく食べましょう。「こわいよ彼女。まじでさ」

ぞろぞろと職員室に向かう。ノックしてから入りましょうという張り紙がしてある。7人はおれを取り囲むようにして立つと、さあ入れというようなしぐさをする。ガラッと戸を開けるともう目の前に女が立っていてこれはマジでびびる。見ると普通に女の先生だ。ちょっと恐そうなタイプだが、それは先生として恐いということで、お化けとして恐いというのとは違う。女は手を後ろで組んだまま俺に聞く。

「好き嫌いなく食べてますか？」

「え？」

何だ？ どう答えりゃいいんだ？ その時気がつく。女の後ろ、奥の方から何ともいえない匂いがしている。何か吐き気を催すような匂いが。女は口元だけで笑ってもう一度言う。目は俺をにらみつけている。絶対に逃がさないという表情だ。

「好き嫌いなく食べてますか？ さあ、『はい』か『いいえ』で答えなさい」

(「好き嫌い」 ordered by 音乃屋-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたならぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブックログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできるのですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じをご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ほくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

学校の七不思議

<http://p.booklog.jp/book/35365>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/35365>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/35365>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.